

資 料

## 『棲重思乱菊』 翻刻と解題

周 新 慧

瀋陽師範大学外国語学院講師

### 解題

本作品は、戯作者の関亭伝笑が文政九年（一八二六）に出版した合巻である。現在は、国立国会図書館、専修大学、名古屋蓬左文庫にその所蔵が確認できる。今回の翻案では、名古屋蓬左文庫を底本として用いる。

### 書誌

底本 国立国会図書館蔵本 作画 関亭伝笑作・溪斎英泉画。

体裁 半紙本（十八・一縦×十二・三横 糹）上編十一丁・下編十一丁、合一冊二十二丁。

題籤 絵題籤が付されており、女の絵と「棲重 上編」とある。（右肩に伝笑作 英泉画 若狭屋版）

刊記 文政九年（絵題籤より） 板元 若狭屋与市。

所蔵 国立国会図書館・専修大学・名古屋蓬左文庫。

### 凡例

一、本書の翻刻にあたっては、蓬左文庫蔵本を底本とした。なお、蓬左文庫蔵本において判別できない個所については、国立国会図書館蔵本を参考した。

一、翻刻に関しては丁ごとに施したが、人物等の会話文に関してはその場面ごとに施した。

一、原本には句読点がないが、適宜「、」「。」を施した。

一、平仮名文字は適宜漢字に直し、原文は振り仮名として残した。ただし、最初から漢字で表記され、振り仮名の施されている個所については（ ）で括った。

一、本文中の「ゝ」「へ」などの繰り返し記号については、基本的に原本に忠実である。ただし、読みやすさを考慮し、適宜漢字に改めたために不都合が生じたといった場合はその限りではない。

一、仮名遣いに関しては原本の通りであるが、適宜に清濁を補った。

一、本文中、会話文と思われる部分には「」を補った。

一、誤刻と思われるものに関しては原本の通りだが表記し、その横に「ママ」を補った。

### 翻刻

#### 表紙

棲重思乱菊 全  
英泉画 伝笑作  
若狭屋板



#### 一丁表

##### 前編上

筆洒屋清垣

(その) (いけ) (たまも)  
其のちも池の玉藻の  
(はげ) (のぎつね)  
まへうしろ化する野狐  
(かかげ)  
影をうつして

##### 伝

文政八年酉花月稿成

九年戌正月発兌

(つまかさねおもいのらんぎく)  
棲重思乱菊

関亭伝笑作 溪斎英泉画

司馬神明前 若狭屋与市板元



一丁表

伝



二丁表

一丁裏

二丁表

らんぎく きつね <sup>すがた</sup> 乱菊や狐にもせよこの姿

宝井其角

(きかいちもり) (けいせい) (くず は) 堺 乳守の契情葛の葉

一丁裏

(がいこつ) <sup>よそふ</sup> 骸骨のうへを装て花見かな

伊丹鬼面

(しのだなかわら) (ごうししのだせうじ) (むすめ) 信太中村の郷士篠田庄司が娘かげろふ



三丁表

二丁裏

三丁表

(ふゆ) <sup>しのだ (もり) (きつね)</sup> 冬がれや信太の杜に狐なく

宮田麟房

(せんしうさかいのもくだいあしやどうまん) 泉州 堺 目代蘆屋道満

(あうにんいしかわあくみぎゑもん) 漂客石川悪右エ門

二丁裏

(あきかぜ) <sup>(ふけ) (くず は) (うら)</sup> 秋風はすごく吹ども葛の葉の恨みが

ほには見へじとぞ思ふ

新古今 和泉式部

かげろふ妹 榭

(やへがきりうけんぼうしはん あ べのやす) 八重垣流劍法師範阿部安名



か<sup>た</sup>ず、や<sup>わか</sup>がて立ち別れてぞ<sup>ゆ</sup>行き<sup>す</sup>過ぎけり。

「<sup>まへ</sup>前方大坂に<sup>さか</sup>ゐた江戸の<sup>ゑ</sup>梅幸に<sup>ど</sup>そのまゝ<sup>ばい</sup>じや。<sup>かう</sup>「<sup>と</sup>よい<sup>ご</sup>殿御<sup>じ</sup>じやないか。

大々叶いこひ茶や

### 五丁裏

その頃、堺の目代に蘆屋道満とて、軍学兵書をよく明め、安名とは水魚の交わりをなせり。ある時、徒然の折から、遅しき浪人來りて「某は難波新地に住居して石川悪右エ門と申者なり。当国信太の杜を切り開き、田畑に開発なさんには国家の益とならんこと」を物語り、一通の願い書を差し出しけるに、道満披見してしばらく考へ「如何にも信太は不用の杜なり。国のために良きことならば、田畑にせんこと易し。さりながら国の神に聞こへ上げて、その後沙汰に及ばれん。こと成るまでは穩便に計り給へ」と申すにぞ、浪人は低頭して道満を尊敬なして退きぬ。

「<sup>おつ</sup>追て御沙汰に及ばれん。<sup>さ</sup>何分御賢慮ひとへに願ひあげます。

### 六丁表 前編下

頃しも秋の初め、阿部安名は堺の目代道満方へいたり、終日書を学びて、帰る道すがら、小雨そぼ降り。津守寺の辺を過ぎる折しも、一団の鬼火飛び來り、安名が傘の上を飛び巡りて消へ失せぬ。安名はいと怪きことに思ひながら、阿倍野の我が家へ急ぎけり。

### 六丁裏・七丁表

然るに、津守寺の北門の藪陰木立茂りし柳の下に、年の頃十七八とも見へし女、白き衣裳して縊れ死しむたり。安名はこれを見て驚き、「最前の鬼火」と言い、今またかゝることを見るも不思議のことなり。さだめて親の目を忍び、切なる小泥にかく成り行きけん。不憫のいたりと称名して行き過ぎんとするに、動くやうに見へしまゝ、朧月夜に透かし見て、乳の辺を探り見るに、いまだ死してまもなきや、胸のところ少し暖かなれば、心静かに繩を解きて抱き降ろし、かゝる時は男の肌にて暖むれば、息吹き返すと伝へ聞きたれば、いざや「試して見ばや」と、我が胸を開けて女の肌へ押し当て、抱き抱へていたるに、しばらくして細き息出でて目を開き、安名を見て「お前は何処のお方ぞ」と言ふ。安名、「さては心付かれしか。我は近き阿倍野の者也。そなたが縊れし体を見るに忍びず、次へ

「<sup>け</sup>こは怪しからぬことじや。

## 七丁裏・八丁表

〔続き〕不憫いやまし、もしや助かることもやとかくは計らひしぞ。そなたは何ゆへに縊れ給ふ。恋ゆへならば世話して取らせん。隠さず語り給へ」と言いつゝ撫で摩りて勞りける、その時、女はにつこと打ち笑み「さよふの妾りなことならず。妾はこの辺りの者にて、かげろふと呼べるゝなり。盗賊のためにかくの有り様、君の御目にかゝらずは、冥途の道へ赴かんに、浅からぬお情けに蘇生せしこそ嬉しけれ。我が二親もさぞや我を尋ねつらん。このまゝお別れ申さん」と立ち上がるを押し留め、とやかく言ふ間に夜も更けぬ。「この行先も氣遣いなり。いざや送ってまゐらせん」と言へば、かげろふお釈して「若きお方と道連れは、男狂ひと疑われんも面映し。お許しあれ」と言いながら、互いに見交す顔と顔、行く後影、安名は見る間に何時か姿は見へざりけり。

さて安名はその夜我が家へ帰り、かげろふを蘇生させしは一つの陰徳を施せしと心に喜び、灯台の下に書を読み、好める道には夜もすがら更くるも知らぬ丑三つ頃、二十歳あまりの女一人いと麗しく化粧して、案内ながら入り来り、安名が前に手を支へ、「妾は塚の乳守にて葛の葉と呼べるゝ傾城なり。君の高名慕はしく、書籍の御指願はんため、夜中ながら押してこれまで参りしぞや。何卒教へ給はれ」と、零れ掛りし愛嬌に、安名はしばし見惚れて「そはいと易きことなり。夜中はこの屋に我一人にて他に人なし。打ち解けて語り給へ」と、急焼に仕掛ける茶の花が口取り添へて差し出だし、四方山の話より和漢の書物、または歌書なぞの〔次へ〕  
 へそんなら氣を付けて行き給へ。へお名残惜しい。

## 八丁裏・九丁表

〔続き〕類を問答するに、一つとして受け答へざることなければ、安名は心中に怪しみ、いかにも希代の女なりといよへ打ち解け、手を取りて引き寄せ、「幸いに人なれば、御身と妹背の語らいせん」と言へば、葛の葉面映げに否める色なく「かゝる兼学の人にこそ身を任するは、女子に生まれし甲斐あり」と互に笑い笑はれつ。その夜はともに枕を並べ、惜しまるゝ夜は明けはやくきぬへ告ぐるには鳥の声諸共に、葛の葉は起き出でゝ懐中鏡に顔映し、髪の後れを搔き上げて帯締め直し、「初対面から夫定め、恥づかしくも嬉しけれ、妾とても忙はしき廊の勤め、これより一夜置きに見へまいらせん。必ず見捨へ給ふな」と袖振り合はず伽羅の香に、安名は門辺に送り出で、見送る

うちも足早に見へずなりにけり。これより葛の葉は隔夜に來り。雲となり雨となり偕老の契り浅からざりしとぞ。さてある夜、小雨しきりに降り注ぎ、安名は心寂しく、今宵は葛の葉が來らざりし夜なれば、早くも臥所に入、枕辺に歌書を取り出だして読みあたるに、座敷の障子しめやかに押し開けて入り来る者あり。安名は次へ

「また訪れの夜を待ちます。お恥づかしい昨夜の御見。」

九丁裏・十丁表

続き よく―これを見るに、先に津守寺の藪陰にて、縊れあたる、蘇生させつるかげろふなれば、「そなたはいかゞしてこゝへ來ませし」と問へば、かげろふ打ち笑みて「君の情けに肌と肌合せて蘇生させ給はりし御恩を思へば、いとゞさへ恋慕はしく、忍びてこゝまで訪れし妾が胸を推量して、お寝間の伽ともなし給はれ」と、後言ひ兼ねて襟に顔差し俯つきし容顔に、安名見惚れて切なることは思へども、乳守の傾城葛の葉と深く言い交はせしことあれば、さまゝ教訓して「はや―帰り給へ」と勸むれば、かげろふは安名がかほつれへ顔徒然と打ち守り、「堅いばかりが侍ならず、色をも香をも知る人を眞の武士と申さずや。今更思へば、その時にいつそ死んだがましならぬ、生中に助けられ君に捨てられ何かはせん。また縊れて死なんもの、さらば」とばかりに立ち上がる。裾を捉へて申よふ「我には乳守の傾城葛の葉といへる本妻あり。彼は勤めの身なるゆへ、我が方へは隔夜に通ひて慰めぬ。葛の葉が來ぬ夜は、そなた來りて語り給へ」と、その夜はかげろふとともに臥所に入り、はや東雲を告ぐる頃、かげろふ安名に向かい、一つの鈴を取り出だし、「御身妾を次へ

「そはお情けない、今の御言葉。ハテ、なんとせう。」

十丁裏

続き め 召さんとならば、この鈴を鳴らし給へ。その音を慕ひて來るべし」と安名に渡し、何処へか帰りけん。これよりかげろふは葛の葉が來らぬ夜は一夜置きに來りて、安名に睦み語らいけり。諺にいへる、女の黒髪には荒れたる大象も繫ぎ、女の履きたる木履にて作れる笛には妻恋ふ鹿も寄るとかや。安名はかりそめにかげろふが慕ひ來りしを宥めけれども、切なる事ゆへ黙しがたく、いよ―寵愛浅からず、水もらさじと睦みける。

伝  
 (つまかさねおもいらんぎく)  
 棲 重 思 乱 菊

関亭伝笑作 溪斎英泉画

司馬神明前 若狭屋与市板元

## 表紙

棲重思乱菊 丙戌春

下編

## 十一丁表 後編上

安名はかげろふを愛すに従い、いつしか顔色衰へけるに、ある夜かげろふと枕をとともに寝物語に、かげろふ申けるは、「君の本妻と定め給ふ葛の葉は、いかなる器量にておわすらんと、この頃秘かに垣間見しに、いかにも優れて美しけれど、まことは人間にあらず、年古る狐にて、君を惑はし慰むならん。「かまへて油断し給ふな」と言へば、安名は嘲笑い、「譬へ狐にもせよ、葛の葉は本妻、そなたは手かけ、二人ともに見捨てはせじ、さのみ案じ給ふな」と、その夜はわりなく語らいけり。その次の夜は葛の葉来り、睦ましく語らい、安名が顔つくづへ打ち守り、「我が夫の様子、この頃面痩せ給いぬ。こは辛勞のことありや。また我がほかに増花ありて、それゆへのことならめ。隠さずに明かし給へ、語り給へ」と責めければ、安名も今は慎むに詮方なく、近頃さることありて、かげろふといふ女に見へしわけを語りけるに、葛の葉しばらく考へ、「常の女に見へ給ふ、ともかく憔悴はし給ふまじ。その女こそ訝しけれ。いかなる女にや、妾に一目見せ給へ」と、障子の陰に隠ろひて様子を見ばやと立ち上がり、次へ

〽この頃、持病の癪が起こつた。〽お前の身に何事もないよふにしたい。

## 十一丁裏・十二丁表

続き 次の座敷へ忍び入る。その時、安名はかげろふが与へし鈴を振り鳴らせば、忽然としてかげろふ入り来り、葛の葉は障子の陰に思はず「はつ」と声立てければ、かげろふ狼狽へ、「この屋に人あり」と庭の方へ逃げ去りけり。葛の葉は慌てゝ奥より駆け出で、溜息吐いて胸撫で下ろし、「こは怪しからぬ。あの女こそこの世を去りし骸骨なり。さてこそ君の病はゆへありぬべき。重ねて近づけ給ふな」と言へば、安名は打ち笑い、「そなたの目に骸骨なれば、我が目にも骸骨なり。彼が仲を隔てんと、御身が怏気の〇にこそ、そふ言はるゝそなたこそ古狐ならん」と居丈高に息巻けば、葛の葉擦り寄り膝立て直し「けいせは手管に客を化かすが渡世、狐と言われて恥づかしからず。良き葉は苦き譬へ、妾がまことをあだに聞き做し給ふこそ、やがて思ひ知り

給はん。これより再び見へまし。ア、天なるかな、命なるかな」と嘆息して、  
 暈を蹴立てゝ出で行きぬ。安名は葛の葉が諫言耳にも掛けず、よしやよしのゝ  
 中絶へて葛の葉と妹背の縁は尽きるとも、こゝにも人のありけると、まとも  
 いぜんの鈴振り鳴らせば、何処よりかかげろふ入来り、安名は手を取つて側へ  
 ひき寄せ、「二人が仲を嫉みてや。葛の葉はそなたを骸骨の化けたりと言へ  
 り。さよふなるか」と問へば、かげろふにつこりとして「そは君と我とを

次へ

今更恥づかしい。君にもしものことあらば、我等が願ひは水の泡、はや  
 ふ本復なし給へ。

## 十二丁裏・十三丁表

続き 恨む女の賢しら言、かまへて心に留め給ふな」と、これより葛の葉が来  
 らぬを幸いに、かげろふは日夜安名に側を離れず、鴛鴦の羽を重ねて付き纏  
 いしが、秋風の身にしみ、<sup>へ</sup>として何とやら物寂しく、これより安名は心地  
 優れず、食も進まざりしかば、かげろふは忠実立ちて介抱疎かなしと雖も、  
 安名は瘦せ衰へ、立たんとするに足立ゝず、息も忙しく、たゞぼうせんとせ  
 し折から、庭の片方に声ありて「やよ、我が夫、今こそ思ひ知り給はん」と、  
 入来る者は葛の葉なり。かげろふ驚き、逃げ行かんとするを足早に捕へて、  
 安名が前に引き据へて、「本妻と妾の対面は今が初めて。御身はこの世になき  
 人として、かくまで男を恋慕ふは、深き願ひのあるならん。慎まず明かし給  
 ひね」と問われて、かげろふ差し俯きは、降り落つる涙を袖に払い、安  
 名に向かひ、「妾は信太の郷土庄司といふ者の姉娘なるが、石川悪右衛門とい  
 ふ浪人、何処にて垣間見けん、我が身に深く執心して、文に物言わせてたび  
 〱送ると雖も、素性も知れざる荒男に身を任せんもほいなければ、そのまゝ  
 に搔い破り捨て、返事だにせざるを憤り、ある夕暮れ、門辺に立ちて涼みあ  
 たるを搔い攫い、物言わせじと口に手を当て、津守寺の藪陰なる柳の下へ連  
 れ行き、荒縄にて縊れ殺し、その所を深く掘て、亡骸を埋み逃げ去りしを、  
 知る人なきを口惜しく、敵を取りてくれん者は君よりほかに誰あらんと、仮  
 に縊れし姿を現し、君の助けを受けしと見せ、その場は消へて立ち去りしが、  
 世にある時に住吉にて君を見初めて恋慕ひ、死しても迷ふ煩惱の絆に引かれ  
 て隔夜に通ひ、葛の葉殿が来ぬ夜は、二人枕の数も重なるほど愛しとのこと、  
 思ふより中有に迷ふ幽霊の切なる恋に迷ひぬるこの身の願ひも打ち忘れしこ  
 そ浅ましけれ。君の病全快の上は直ちに櫛に敵を討たせて給へ。名残惜しく

もさらばぞ」と立つを、葛の葉、「これ、のふ、しばし」と留むるうち、姿は消へて一団の陰火となりて飛び去りぬ。葛の葉いどゝ打ち萎れしが、顔を上げ、「我とても人間にあらず、信太の柱に年をふりし次へ」

## 十三丁裏・十四丁表

続き 牝狐なり。この度、信太の柱を切り開き、新田開発せんと目代道満へ秘かに勧むる者あり。今この柱を切り開かば、我が眷族子孫の狐路頭に迷ひ、狩人のために打殺されんを嘆かはしく、このこと妨げなさんにも、畜生の身をもつて道満が威に恐れ、近寄ること能はざれば、御身を頼みてこの始末を止めてもらわんために、乳守の傾城葛の葉と変化て、妹背の契り一夜は来りて枕を汚し、一夜は子供に血を与へ、日をふるうちに、かげろふが魂魄に迷はされし君の病は、耆婆扁鵲が薬にても癒ゆること思ひも寄らず。今君を失いては、我が望みの叶はねば、いづぞや君に逆らいてしばらく来らぬそのうちにあまねく諸国の神山を駆け巡り、仙人に見へて不思議の靈薬を乞ひ受けしぞ。これを服して全快して、我が望みを叶へて給べ」と言ひつゝ、一掴みの薬を渡し、形は見へずなりにけり。安名は夢見しごとく、「譬へ狐は愚か、虎狼にもせよ、一度夫婦となるうは、何か厭わん。今一度姿を見せてくれよや」と立たんとするに、腰立たず、呆然たりしが、きつと思ひ諦め、かく恩愛に迷はんより、片時も早く快気して、彼が望みを取り持たん。特段の薬を服しければ、忽ち心健やかに快気せしこそ不思議なれ。○さて安名は病とみに癒へたれば、目代蘆屋道満方へ至り、しばらく病に伏して疎遠せし次へ

不思議なことを聞くものかな。いサア、尋常に。

今四文一合遣らかすとを忌々しい。縄掛かれエ。動くな。

## 十四丁裏・十五丁表

続き 情を述べければ、道満も絶へて久しき面会の喜びを告げ、さて安名申けるは「秘かに殿へ願ひあり。聞こし召し給はれ」と言へば、道満「その願ひといふはいかなることか、あからさまに語り給へ」と言ふにぞ、安名擦り寄り、「近頃信太の柱を切り開き、新田に開発せんと願ふ者あるよし、このことを破談なし給はゞ、大いなる陰徳にこそ」と申ける。道満聞きて「そのことにおいては願ひ人と我のみにて、ほかに知る人嘗てなし。いかにして知られけん」と尋ねに、安名申けるは「その信太に年古る牝狐 眷族子孫数多あり。今この柱を切り開かば、数多の狐打ち殺されんを嘆き、件の牝狐 乳守の傾城葛の葉となりて、我が方へ入り込み、委細を明かしてこの願ひ取り次ぎくれ

よと頼みゆへ、かくは御話申なり」と聞いて、道満「いかにも不思議のことどもなり。しからばその願ひ人石川悪右衛門を呼び寄して、新田開発の事を止め申べし」と宣へば、安名は耳を澄まして「いや、その石川悪右衛門といふ者、信太の郷土庄司が姉娘かげろふといふ女を殺し、津守寺の藪陰なる柳の下へ埋めたり。そのかげろふが亡魂、我が家へ来りて次へ

### 十五丁裏

続き委細を語り、妹榊に敵を討たせてくれよとの頼みなれば、この一行も聞こめせ」と、ありし次第を物語れば、道満も重ね、不審して組子どもに申付られ、悪右衛門が難波新地の隠れ処へ押し向かわせ、難なく搦め捕らせて広庭へ引き据へたり。安名は物影にてこれを見るに、以前我が方へいちうら六蔵と名乗りて、剣術の試合に打負け逃げ去りし浪人なれば、知らぬ面持ちにて、道満が裁許を窺ひいたり。その時、道満悪右衛門に向かひ、信太の郷土庄司が姉娘かげろふを殺せしことを穿鑿するに、さまと陳じて言わざりけり。道満秘かに津守寺の藪陰へ人を遣はし、柳の下を掘らせけるに、かげろふが死骸、縊れしまゝにて生けるが如くありしを持ち帰りて、石川を責め問ふに、今は隠すに詮方なく、ありのまゝに白状なしけるにより、信太の庄司を召し寄せ訪ねけるに、庄司「娘かげろふ事、過ぎし頃、背戸口に涼みいたりて搔い暮れ見へず。家内の男ども遠近を捜しけれども、終に在り処し知れず。人に殺されし事は神仏も知り給はぬを、殿のさいにて知れたることありがたき事也」と、かげろふが死骸を見て、涙を浮かめて引き取りける。

「きりーうせろ、ふてしい面だ。喧しい折助めらだ。

### 十六丁表 後編下

堺の目代蘆屋道満は、石川悪右衛門が人殺しの罪重ければ、仕置きにも申付くべきところ、思ふ子細あれば、その罪を許し、「浪人悪右衛門を百杖打つて追ひ放すべし」と譜代の家来与勘平野勘平の二人に申含め給へば、二人は悪右衛門を津守寺の此方へ引き出だして、いつぞや安名が方にて相手となり、打ち負けたる遺恨を思ひ、身骨も砕くるばかりに打ち据へて、大小を渡して追い放しける。これは道満が深き慮りにて、榊が姉の敵といふとも、か弱き女に荒男の立ち合ひ、驚に雀を合わすに等しければ、かく計い、安名に万事を示し合わせて、榊に敵を討たせ遣わすべしとのことにて、安名は信太の庄司が方へ至り、榊が後見して諸事の手筈をさじつなしけり。信太の庄司 敵 討ち

かどで いわ  
の門出を祝ふ。

ゝその場に及んでも、必ず急かぬが良い。ゝ何から何まで御恵み、嬉しうござんすぞへ。

### 十六丁裏・十七丁表

あべの やすな しのだ せうじ しめ あ さかき つ つもりでら ほとり かくろ あく  
阿部安名は信太の庄司と申し合はせ、榊を連れ津守寺の辺に隠いて、悪右衛  
門が追い払はれて来るを今や遅しと、松陰に身を潜めて窺ひみる。かくとも  
知らず石川は、辛き命を助かりしは、道満が愚かなる取り捌きこそ我が幸せ  
となりぬと心中にさみしけるが、与勘平野勘平に強く打たれしゆへ、身体痛  
みて、右へ踰跟めき左へ靡き、酒に酔ふたるとく、以前かげろふを殺して  
埋みし津守寺の辺へ差し掛ゝる時、待ち設けたる榊は踊り出で、「姉の敵かく  
ごへ」と立ち向かふに、思ひ掛けなき悪右衛門、驚きしがきつと見直し、  
高の知れたる小女郎一人たゞ一打ちと、刀を抜いて身構へたり。その時、安  
名は現れ出で、「珍しや、いちうら六蔵、まことは石川悪右衛門、汝を助けて  
追い払われしは、これなる榊に姉の敵を討たせんと、蘆屋道満が深き情け、  
もはや逃れぬ、承伏」と詰め寄するに、石川は弱りし足を踏み止め、気力を  
まして二人ともうちは果たさんとせし折から、日ははや暮れて薄暗き時に、  
不思議や数多の狐火飛び巡りて、榊が手元を照らしつゝ、石川に纏ひ付けば、  
石川はこれを追ひ払わんとして踏み滑りけるを、得たりと榊は走り寄り、姉  
の敵を討ち果せけるぞ潔し。また道満は「石川を取り逃すこともやあらん」  
と、与勘平野勘平の二人を差し越されて、固きうちの警固をいたさせけるぞ  
頼もしき

ゝ姉さんの敵、覚悟しや。ゝとんだ番狂わせな煩い奴らだ。

ゝとても逃れぬは御定まりだ。何にも言ふな。

### 十七丁裏・十八丁表

さかき おぢ よ あね あた あく な  
榊は、思いも寄らぬ姉かげろふが敵石川悪右衛門を討ちし事、ひとへに安名  
が情けによると言ひ、過ぎし弥生に住吉の潮干狩に見初めしなれば、いよへ  
こひした 恋慕ひけるゆへ、父の庄司も、幸い似合しき縁なれば、道満が譜代与勘平を  
仲立ちに頼みて、ついに婚姻させければ、榊は喜び、夫婦の仲も睦ましく、ある  
夜二人とも仮寝の夢に葛の葉来りて、安名に告げて申けるは「君の恵みに  
て我が望み叶い、子孫の狐眷族までいかばかりか喜ばしく、しばらくも君の  
厚愛に絆され、御情けの種を懐妊して男子一人出生せり。狐の腹より生まれ  
しことは慎み給ひて、榊殿の産みし子なりと披露して、継子と思さず、親身

の子と思し召して、隔てなく育て給はれかし」と名残惜しげにさめへと嘆  
 き、涙を袖に受け止めて、一枚の色紙を枕の辺へ差し置いて姿は消へて、暁  
 の鐘に夫婦は夢醒めて、奇異なることに思ひ、互に語る夢合わせに、枕元を  
 見れば、一枚の色紙あり。安名これを取り上げて見れば次へ

### 十八丁裏・十九丁表

続き一首の歌あり。「恋しくば 尋ね来て見よ 和泉なる 信太の社の う  
 ちみ葛の葉」安名は読み終わりにて押し頂き、如何様にも不思議なることなり  
 と、この色紙を秘蔵なしける。今摂州阿倍野街道の百性佐兵衛といふもの、伝来  
 して所持なしける。安名は夢に葛の葉が与へし色紙の歌に「恋しくば 尋ね  
 来て見よ」との手尔波を察し、しばらくも偕老の枕を並べ、我が種を懐胎し  
 て男子を産めりと聞き、日頃恋しく思ひあたることなれば、夫婦連れ立ち、  
 和泉の信太の社へ訪ね行き、もしや葛の葉に哀れやせんとこゝかしこを見巡  
 るに、しんへたる木立の中より、一匹の牝狐、襦袢に包みし赤子を抱き、  
 数多の狐付き添ひて、安名が前に頭を垂れて平伏なし、物は言わねど喜ぶて  
 いにて、件の牝狐は赤子を安名に渡し、一声なきて、数多の狐諸共に形は見  
 へずなりにけり。この牝狐こそ葛の葉なるべし。安名は熱き涙をおさ「畜生  
 ながらも我と交わり我が子を産みしこと、希代の例なり」と抱き取りて見る  
 に、いと愛らしき小児ゆへ、一入に喜び、女房袖が産みし子と世間へ知らせ、  
 袖も腹を痛めずして子供を持ちしこと大きに嬉しみ、乳母を取りて養育なし  
 けり。

玄中記に曰く、千歳の狐は淫婦と化し、百歳の狐は美女に変ずるとあれば、  
 葛の葉もこのたくびならんか。

「本にしをらしいことでござんすのふ。これは不思議。」

### 十九丁裏・二十丁表

然れば、阿部安名はかゝる奇瑞なること例稀なりとて、堺の蘆屋道満に聞こ  
 へ上げて、信太の社へ葛の葉明神とて一社の稲荷に祭り、社玉垣造宮なしけ  
 れば、信太の郷土庄司よりは人気数多を収め、道満よりは三百石の神田を寄付  
 し、ますへ靈験新たにして、所願成就せざる事なく、老若男女貴賤参参し  
 て賑わひける。この社の後ろに六樹の楠の木あり。高さ八丈、回り五丈、太  
 さ五尋にして、枝四方へ茂り、森林たり。諸人木の高さを仰いで、葉の裏を  
 見る。よつて裏見楠の葉ともいへり。すべて葛の裏風、秋風の葛の葉は皆恋歌  
 にして、心の乱れ騒ぐを葛の葉の風に乱るゝに比して詠めるなるべし。

○さてまた安名夫婦は葛の葉が産みし稚児を、阿部童子と名付けて守り育てけるに、成人に従ひ、天性賢く、一を聞いて〔次へ〕

## 二十丁裏

〔続き〕 万事に渡り、人と成りて加茂の保憲に従ひ、天文曆算の術を学び、阿部の清明と名乗りしは、この童子が事なり。安名は道満庄司と親しみ深く、ますへ長く栄へけるも、ひとへに信太稻荷の加護とかや。めでたしへへへ

へへへ。  
坊もだんへ成人して、一人めでたいへ。

へさてでたふ存じます。